公印省略

８農林試第４９３号-７
令 和 ８ 年 ９ 月 29日

各関係機関団体の長
各 病 害 虫 防 除 員 } 殿

福岡県農林業総合試験場長
（福岡県病害虫防除所）

令和８年度病害虫発生予報第７号（10月）について

このことについて、病害虫発生予報第７号を発表したので送付します。

予報第７号

大豆のチョウ目害虫の発生に気を付けましょう

現在、大豆調査ほ場において、ハスモンヨトウに加え、オオタバコガやウワバ類、さらに例年あまり見られないシロイチモジヨトウの発生が確認されています。

チョウ目害虫は種類によって薬剤の効果が異なるため、ほ場での発生虫種に応じた薬剤選定を行いましょう。

また、抵抗性がつかないよう異なる系統薬剤でのローテーション散布を心がけましょう。



図１　シロイチモジヨトウ



図２　オオタバコガ



図３　ウワバ類

＜予想される向こう１か月の天候（令和８年９月26日～10月25日）＞

暖かい空気に覆われやすいため、向こう１か月の気温は高いでしょう。７月から降水量の少ない状態が続いており、これまでの少雨の影響を解消する可能性は小さい見込みで、向こう１か月の降水量はほぼ平年並で、日照時間は平年並か多いでしょう。天気は数日の周期で変わりますが、平年に比べ晴れの日が多いでしょう。

向こう１か月の気温・降水量・日照時間（数値は予想される出現確率）

	平均気温	降水量	日照時間
九州北部地方	低10 並30 高**60**％ **高い**見込み	少**40** 並30 多30％ ほぼ平年**並**の見込み	少20 並**40** 多**40**％ **平年並か多い**見込み

（福岡管区気象台　令和８年９月24日発表１か月予報より抜粋）

10月における主な病害虫の発生動向は、次のように予想されます。

作物名	病害虫名	現　況 （発生量）	10月の発生予報 （発生量）	
		平年比	平年比	前年比
大豆	ハスモンヨトウ 吸実性カメムシ類	少 並	少 並	並 並
かんきつ	ミカンハダニ	少	やや少	やや少
かき	炭疽病 フジコナカイガラムシ	少 少	少 少	少 並
果樹共通	果樹カメムシ類	多	―[3)]	多[3)]
冬春イチゴ	うどんこ病 炭疽病 ハダニ類	並 やや多 並	並 やや多 並	並 やや多 並
アスパラガス	斑点性病害（斑点病・褐斑病） アザミウマ類	少 少	―[4)] ―[4)]	やや少 やや少
冬春ナス	ミナミキイロアザミウマ	やや少	やや少	やや少
野菜共通	ハスモンヨトウ オオタバコガ コナジラミ類	やや多 並 やや多[5)]	やや多 並 やや多[5)]	やや多 並 やや多

注１）予報の発生量は、平年および前年と比較を「少、やや少、並、やや多、多」の５段階で示しています。
注２）予報の根拠には、巡回調査、防除員の調査、予察灯・トラップでの誘殺状況調査等に基づく発生、気象予報からみた病害虫の発生条件を必要に応じて記載しています。
それぞれの条件は、少発生（－）、やや少発生（－～±）、並発生（±）、やや多発生（±～＋）、多発生（＋）として示し、＋－を総合的に判断して発生量を予想しています。
注３）果樹共通・果樹カメムシ類の発生量は、年次変動が大きいため、前年比としています。
注４）アスパラガスの調査は２０２４年から開始されたため、平年値がなく、前年比を記載しています。
注５）野菜共通・コナジラミ類では各地点の調査開始～２０２５年までの平均を平年値としています。

【普通作物：大豆】

１　ハスモンヨトウ

（１）予報の内容

発生量：平年より少、前年並

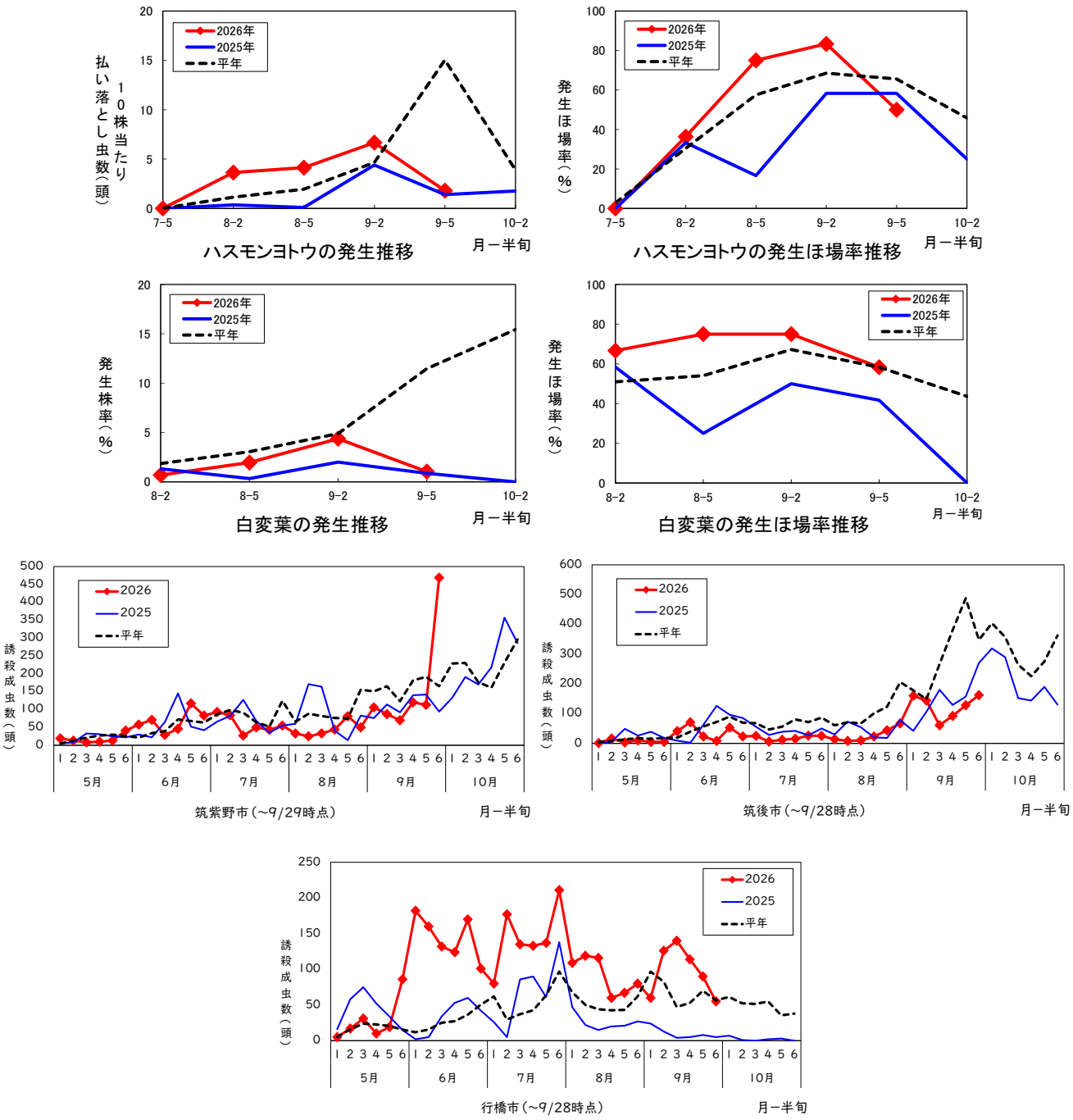
（２）予報の根拠

ア　９月５半旬の調査の結果、発生量は平年より少なかった（－）。
10株当たり払落とし幼虫数 1.8頭（平年 15.0頭、前年 1.4頭）
発生ほ場率 50.0%（平年 65.6%、前年 58.3%）

イ　９月５半旬調査の結果、白変葉の発生量は平年より少なかった（－）。
白変葉発生株率 1.0%（平年 11.5%、前年 0.9%）
発生ほ場率 58.3%（平年 58.3%、前年 41.7%）

ウ　９月１～５半旬のフェロモントラップにおける誘殺成虫数は平年より少なく推移した（－）。

エ　向こう１か月の気象予報では、やや多発生の条件となっている（±～＋）。



フェロモントラップにおけるハスモンヨトウの誘殺虫数の推移

（3）防除上注意すべき事項

ア　中齢幼虫になると薬剤の効果が低下するため、早期発見に努め、若齢幼虫のうちに薬剤防除を実施する。

イ　フェロモントラップを活用した防除適期の目安は、誘殺ピークから 10 日目頃であるが、地域によって誘殺消長に差があるため、必ずほ場で発生状況を確認し、防除する。

ウ　**今後の発生状況については、病害虫防除所のホームページを参照する（以下の病害虫についても同様）。https://www.pref.fukuoka.lg.jp/contents/fukuoka-bouzyosyo-doukou.**

エ　一部の薬剤においては、薬剤感受性の低下が懸念されることから、薬剤の選定に留意する。また、同一系統薬剤の連用は避け、ローテーション散布する。

オ　**農薬の使用および散布等にあたっては、最終頁の内容を確認の上、適切に実施する（以下の病害虫についても同様）。**

２　吸実性カメムシ類　※10-５平年値はＲ１～７年平均

（１）予報の内容

発生量：平年・前年並

（２）予報の根拠

ア　９月５半旬調査の結果、発生量は平年並であった（±）。

・ミナミアオカメムシ・アオクサカメムシ

10 株当り払い落し成幼虫数 0.70 頭（平年 0.68 頭、前年 1.17 頭）

発生ほ場率 41.7%（平年 37.0%、前年 58.3%）

・ホソヘリカメムシ

10 株当り払い落し成幼虫数 0.17 頭（平年 0.13 頭、前年 0.20 頭）

発生ほ場率 25.0%（平年 22.1%、前年 25.0%）

・イチモンジカメムシ

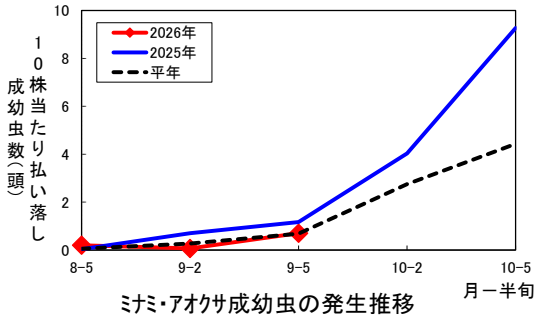
10 株当り払い落し成幼虫数 0.30 頭（平年 0.15 頭、前年 0.37 頭）

発生ほ場率 41.7%（平年 18.9%、前年 41.7%）

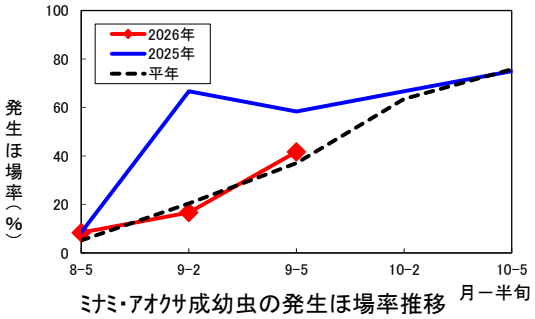
イ　ミナミアオカメムシの県下５か所の予察灯における９月１～４半旬の誘殺虫数は平年並であった（±）。

146 頭（平年 127.1 頭、前年 358 頭）

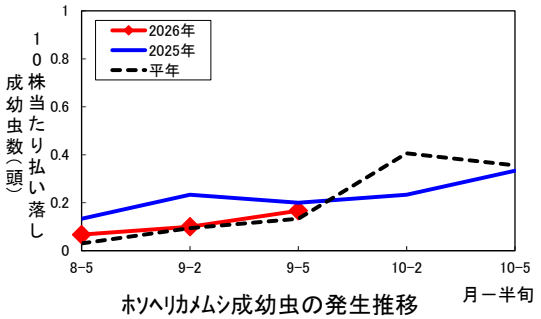
ウ　向こう１か月の気象予報では、やや多発生の条件となっている（±～＋）。



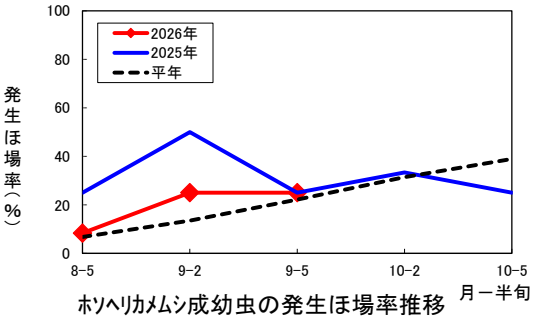
ﾐﾅﾐ･ｱｵｸｻ成幼虫の発生推移



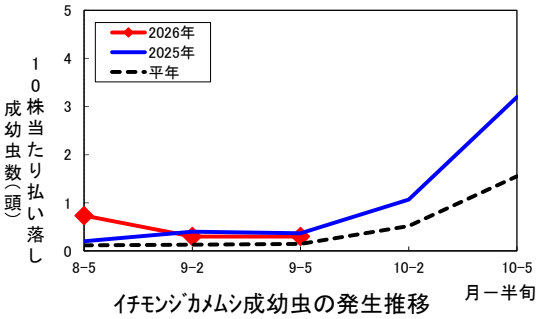
ﾐﾅﾐ･ｱｵｸｻ成幼虫の発生ほ場率推移



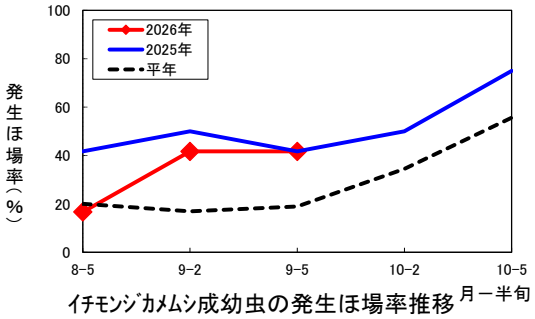
ﾎｿﾍﾘｶﾒﾑｼ成幼虫の発生推移



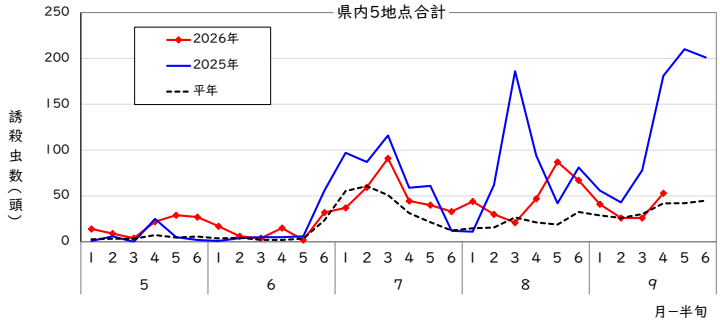
ﾎｿﾍﾘｶﾒﾑｼ成幼虫の発生ほ場率推移



ｲﾁﾓﾝｼﾞｶﾒﾑｼ成幼虫の発生推移



ｲﾁﾓﾝｼﾞｶﾒﾑｼ成幼虫の発生ほ場率推移



予察灯におけるミナミアオカメムシの誘殺虫数の推移

（３）防除上注意すべき事項

ア　吸実性カメムシ類による被害は低密度でも品質に大きく影響し、幼莢期から子実肥大期にかけての被害が著しいので、開花期 30 日前後（９月中旬～下旬）とその後７～10 日後に２回目の防除を行う。

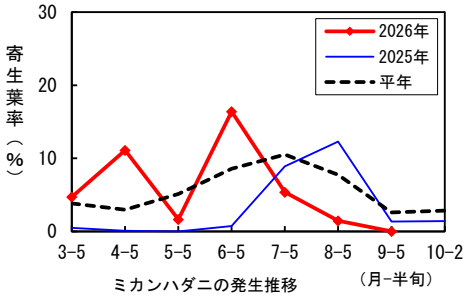
イ　薬剤散布を行う場合には、薬剤が着莢部によくかかるよう丁寧に散布する。

ウ　カメムシ類は広範囲に移動するので、できるだけ広域一斉防除を実施する。

エ　ミナミアオカメムシは、例年９月下旬～10 月上旬にかけて発生量が急増するので、発生状況には十分注意する。

【果樹：かんきつ】

１　ミカンハダニ



ミカンハダニの発生推移

（１）予報の内容

発生量：平年・前年よりやや少

（２）予報の根拠

ア　９月５半旬調査の結果、発生量は平年より少なかった（－）。

寄生葉率　0%（平年 2.6%、前年 1.4%）

発生ほ場率　0%（平年 28.5%、前年 36.4%）

イ　向こう１か月の気象予報では、並発生の条件となっている（±）。

（３）防除上注意すべき事項

ア　果実に寄生が認められる場合は、薬剤防除を実施する。

イ　薬剤防除にあたっては、薬液が葉裏に十分かかるよう丁寧に散布する。また、薬剤感受性の低下を避けるため、異なる系統の薬剤をローテーション散布する。

【果樹：かき】

１　炭疽病

（１）予報の内容

発生量：平年・前年より少

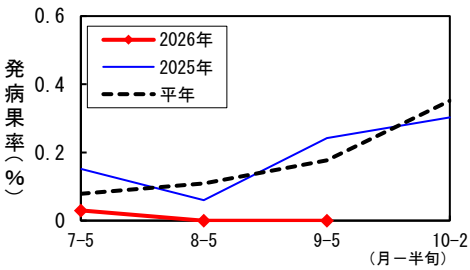
（２）予報の根拠

ア　９月５半旬調査の結果、発生量は平年より少なかった（－）。

発病果率　0%（平年 0.21%、前年 0.24%）

発生ほ場率　0%（平年 22.9%、前年 27.3%）

イ　向こう１か月の気象予報では、並発生の条件となっている（±）。



果実における炭疽病の発生推移

（３）防除上注意すべき事項

ア　伝染源となる罹病枝や罹病果は、見つけ次第園外に持ち出し処分する。

イ　降雨が続いた場合や、前年発生が多かった園では薬剤防除を実施する。

2　フジコナカイガラムシ

（１）予報の内容

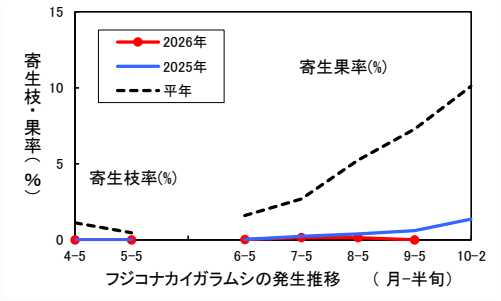
発生量：平年より少、前年並

（２）予報の根拠

ア　９月５半旬調査の結果、発生量は平年より少なかった（－）。なお、調査ほ場11地点のうち９地点にて交信攪乱剤使用。

寄生果率　0%（平年 7.3%、前年 0.6%）

発生ほ場率　0%（平年 69.6%、前年 36.4%）



イ　向こう１か月の気象予報では、多発生の条件となっている（＋）。

（３）防除上注意すべき事項

ア　薬剤防除に当たっては、天敵への影響が比較的少ない薬剤を選択する。なお、果樹カメムシ類の防除等でやむを得ずフジコナカイガラムシの天敵に影響のある薬剤を使用する際は、リサージェンスが起こる可能性があるのでフジコナカイガラムシにも効果のある薬剤を選択する。

イ　薬剤がかかりにくい部位に寄生しているので、混み合った枝を整理するとともに、散布むらがないよう十分量の薬液を丁寧に散布する。

【果樹共通：果樹カメムシ類（チャバネアオカメムシ他）】

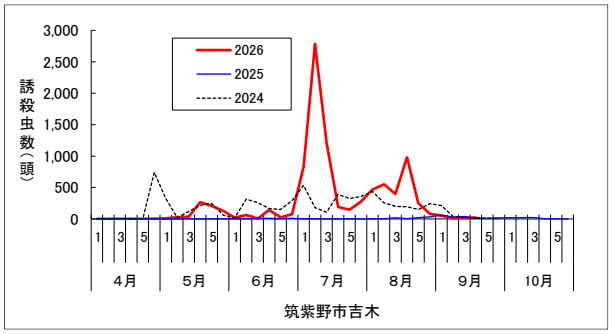
（１）予報の内容

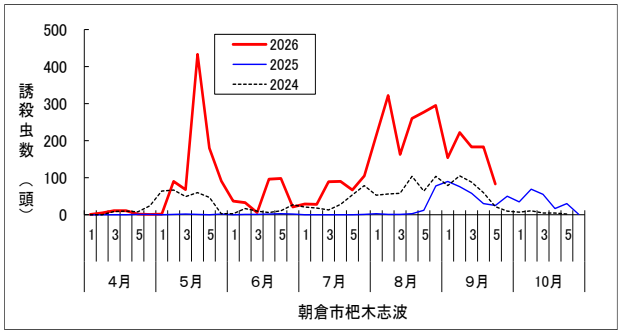
発生量：前年より多

（２）予報の根拠

ア　チャバネアオカメムシの８月４半旬～９月４半旬までの予察灯における誘殺成虫数は、予察灯を設置しているどの地域でも昨年、一昨年よりやや多い～多かった（±～＋）。

誘殺成虫数（予察灯５か所平均）：1,114頭（前年593頭、一昨年396頭）





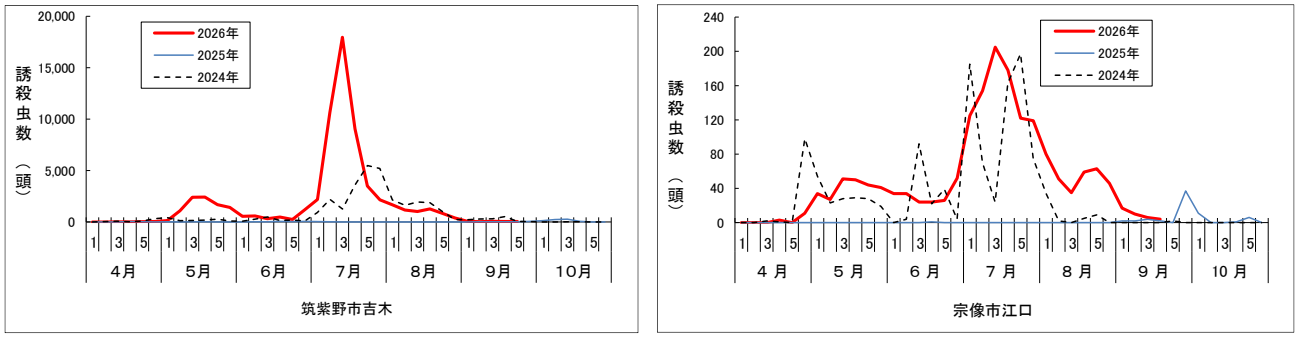
予察灯におけるチャバネアオカメムシの誘殺虫数の推移

※予察灯の他定点の状況については、病害虫防除所ホームページを参照

イ　チャバネアオカメムシの８月４半旬～９月４半旬のフェロモントラップにおける誘殺成虫数は、前年より多かった（＋）。

誘殺成虫数（筑紫野市）：2,746頭（前年76頭、一昨年4,504頭）

（宗像市）　：　205頭（前年10頭、一昨年14頭）



フェロモントラップにおけるチャバネアオカメムシの誘殺虫数の推移

ウ　９月２半旬のヒノキ球果ビーティングによる果樹カメムシ類の捕獲成幼虫数は、前年・平年より少なく（－）、幼虫比率は前年・平年より少なかった。（－）。
捕獲成幼虫数（14地点平均）：　0.8頭（平年8.8頭、前年 9.5頭）
うち幼虫比率　　：　0%（平年 31.1%、前年 15.0%）

エ　９月２半旬のヒノキ球果の１球果当たりの口針鞘数（14地点平均）は前年より多く、11地点においてヒノキからの離脱の目安である25本/球果には達していた。
９月２半旬のヒノキ球果の１球果当たりの口針鞘数平均：23.1 本（前年 11.4 本）
朝　倉　地　域：25 本超/果　　久　留　米　地　域：25 本超/果
筑　後　地　域：18.9 本/果　　福岡・北九州・筑豊地域：23.3 本/果
※県下 14 地点の定点調査結果はホームページ参照

オ　９月５半旬調査の結果、かきでの被害果率は平年よりやや多かった（±～＋）。
被害果率　　1.5%（平年　1.2%　前年　0.4%）
発生ほ場率 81.8%（平年 57.5%　前年 54.5%）

カ　向こう１か月の気象予報では、多発生の条件となっている（＋）。

（３）防除上注意すべき事項
ア　これまでの誘殺状況及び成虫比率・口針鞘数調査から、果樹カメムシ類はほとんどの地域でヒノキから離脱したと考えられる。
イ　果樹園への飛来時期は地域差が大きく、同一園内でも被害の発生は偏りがあるため、園内全体を注意して見回り、飛来を認めたら直ちに防除する。
ウ　広範囲に移動するため、薬剤散布は広域一斉防除の効果が高い。
エ　降雨があると薬剤の残効が短くなるので、散布間隔に注意する。
オ　カイガラムシ類などの天敵に影響のある薬剤を使用する際は、該当する害虫にも効果のある薬剤を選択する。

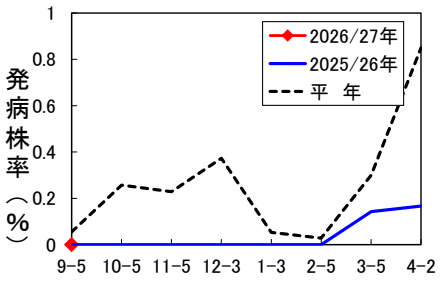
【野菜：冬春イチゴ】

１　うどんこ病

（１）予報の内容
発生量：平年・前年並

（２）予報の根拠
ア　９月５半旬調査の結果、発生量は平年並であった（±）。
発病株率 0%（平年 0.05%、前年 0%）
発生ほ場率 0%（平年 1.1%、前年 0%）
※定植時期のため欠測あり

イ　向こう１か月の気象予報では、並発生の条件となっている（±）。



うどんこ病の発生推移

（３）防除上注意すべき事項
ア　不要な下葉は早めに除去する。薬剤防除は下葉かぎ後に行うと効果的であり、薬液が葉裏にもかかるように丁寧に散布する。

イ　ビニル被覆後は発生が多くなるため、被覆前までに重点的に防除を行う。なお、薬剤感受性の低下を防ぐため、同一系統薬剤の連用を避け、異なる系統の薬剤をローテーション散布する。

2　炭疽病

（1）予報の内容

発生量：平年・前年よりやや多

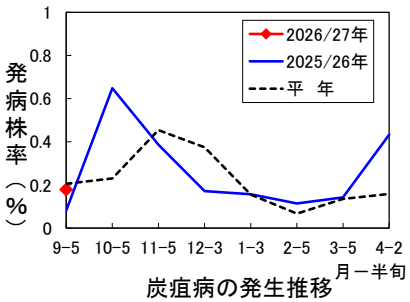
（2）予報の根拠

ア　９月５半旬調査の結果、発生量は平年よりやや多かった（±～＋）。

発病株率 0.20%（平年 0.21%、前年 0.08%）

発生ほ場率 42.9%（平年 17.9%、前年 42.9%）

※定植時期のため欠測あり



炭疽病の発生推移

イ　向こう１か月の気象予報では、やや多発生の条件となっている（±～＋）。

（3）防除上注意すべき事項

ア　育苗ほで炭疽病の発生がみられた場合は、苗の潜在感染のおそれがあるため本ぽでの発生状況に十分注意する。

イ　発病株は、残渣を残さずに周囲の土ごと掘り取り、速やかにほ場外に持ち出し処分する。

ウ　ハウス内の排水を図り、多湿にならないようにする。

エ　親株用の苗や補植用の余り苗についても防除を怠らない。

オ　薬剤感受性の低下を防ぐため、同一系統薬剤の連続散布を避け、異なる系統の薬剤をローテーション散布する。＜福岡県病害虫防除所ホームページ掲載の令和７年度病害虫発生予察技術情報第 13 号（イチゴ炭疽病菌薬剤感受性検定結果）を参照＞

https://www.pref.fukuoka.lg.jp/uploaded/attachment/277102.pdf

3　ハダニ類

（1）予報の内容

発生量：平年・前年並

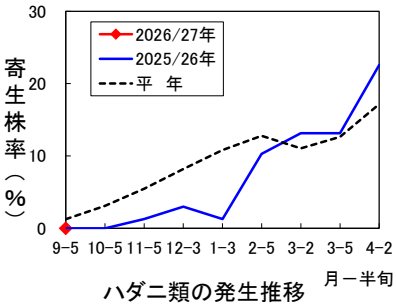
（2）予報の根拠

ア　９月５半旬調査の結果、発生量は平年並であった（±）。

寄生株率 0%（平年 1.26%、前年 0%）

発生ほ場率 0%（平年 24.9%、前年 0%）

※定植時期のため欠測あり



ハダニ類の発生推移

イ　向こう１か月の気象予報では、やや多発生の条件となっている（±～＋）。

（3）防除上注意すべき事項

ア　ビニル被覆後は発生が多くなるため、被覆までの防除を徹底し、初期密度を低下させる。

イ　薬剤感受性の低下を防ぐため、気門封鎖剤を利用するほか、異なる系統の薬剤をローテーション散布する。

ウ　ハダニ類に登録のある薬剤の多くは浸透移行性が乏しいため、薬液が葉裏に十分付着するよう防除を行う。マルチ被覆時の摘葉後に防除を行うと、効果的である。

エ　化学薬剤だけでは防除が困難であるため、天敵を利用した総合的防除を積極的に実施する。＜県ホームページ掲載の「病害虫・雑草防除の手引き」-「IPM の推進」-「イチゴの IPM マニュアル」参照＞https://www.pref.fukuoka.lg.jp/contents/bojonotebiki.html

オ　親株用の苗や補植用の余り苗についても防除を怠らない。

【野菜：アスパラガス】※2024 年度からの調査のため、平年値は無く、前年値との比較。

1　斑点性病害（斑点病・褐斑病）

（1）予報の内容

発生量：前年よりやや少

（2）予報の根拠

ア　９月５半旬調査の結果、発生量は前年・前々年より少なかった（―）。

発病株率 0%（前年 100% 前々年 67%）

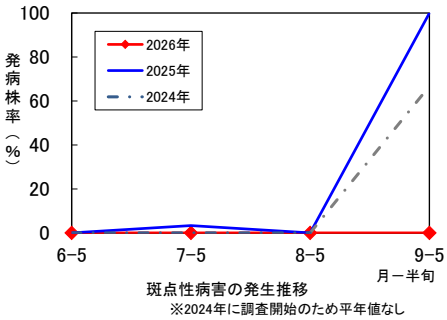
イ　向こう１か月の気象予報では、並発生の条件となっている（±）。

（３）防除上注意すべき事項

ア　発病茎葉は見つけ次第速やかに除去し、ほ場外へ持ち出し処分する。

イ　不要な茎葉は除去、処分することで通風、採光をよくする。

ウ　多湿にならないように換気に注意するとともに、ほ場の排水対策も心掛ける。



斑点性病害の発生推移
※2024年に調査開始のため平年値なし

エ　病勢が進展すると防除が困難になるので、初期防除を徹底する。

オ　薬剤感受性の低下を防ぐため、同一系統薬剤の連用を避け、異なる系統の薬剤をローテーション散布する。

２　アザミウマ類

（１）予報の内容

発生量：前年よりやや少

（２）予報の根拠

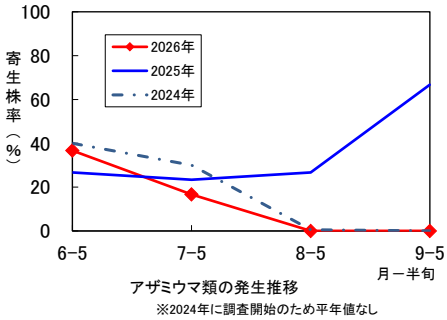
ア　９月５半旬調査の結果、発生量は前年より少なく（－）、前々年並であった（±）。

寄生株率 0%（前年 66.7% 前々年 0%）

イ　向こう１か月の気象予報では、やや多発生の条件となっている（±～＋）。

（３）防除上注意すべき事項

ア　多発生条件では防除困難となるので、発生状況に注意し、発生初期での防除を徹底する。また、定期的な薬剤散布を実施する。



アザミウマ類の発生推移
※2024年に調査開始のため平年値なし

イ　過繁茂は散布ムラの要因となるため、不要な茎葉を除去し、処分する。

ウ　薬剤感受性の低下を防ぐため、同一系統薬剤の連用を避け、異なる系統の薬剤をローテーション散布する。

エ　化学薬剤だけでは防除が困難であるため、除草の徹底や防虫ネットの利用といった総合防除を積極的に実施する。

【野菜：冬春ナス】

１　ミナミキイロアザミウマ

（１）予報の内容

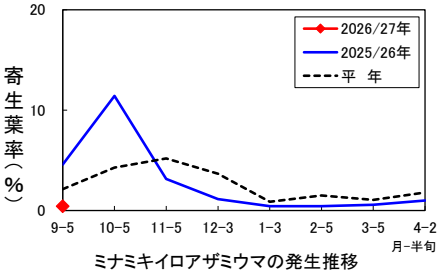
発生量：平年・前年よりやや少

（２）予報の根拠

ア　９月５半旬調査の結果、発生量は平年よりやや少なかった（－～±）。

寄生葉率 0.4%（平年 2.1%、前年 4.6%）

イ　向こう１か月の気象予報では、やや多発生の条件となっている（±～＋）。



ミナミキイロアザミウマの発生推移

（３）防除上注意すべき事項

ア　ほ場内や周辺の雑草は増殖の場となるので、除草を徹底する。

イ　防虫ネットを展張し、定期的な薬剤散布を実施する。

ウ　多発生すると防除が困難になるので、発生状況に注意し、発生初期の防除を徹底する。

エ　薬剤感受性が低下しているため、同一系統薬剤の連用を避け、異なる系統の薬剤をローテーション散布する。

オ　化学薬剤だけでは防除が困難であるため、天敵を利用した総合的防除を積極的に実施する。

【野菜共通】

1　ハスモンヨトウ

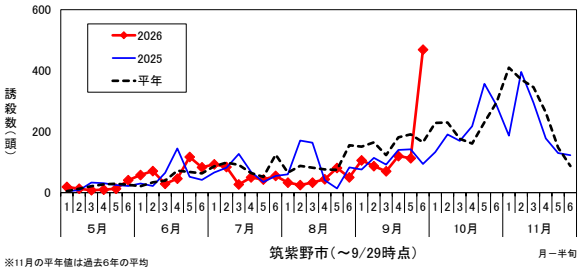
（１）予報の内容

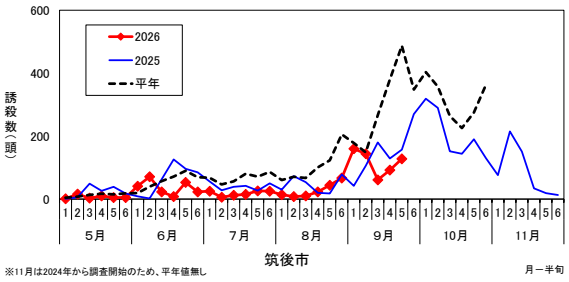
発生量：平年・前年よりやや多

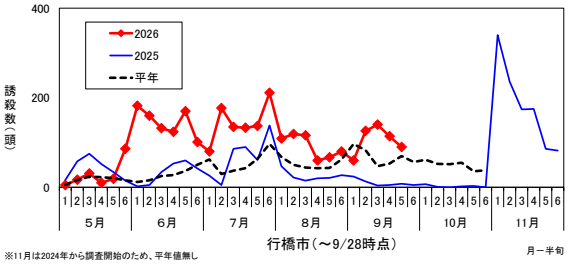
（２）予報の根拠

ア　９月１～５半旬のフェロモントラップにおける誘殺数は、地域による差はあるものの、おおむね平年・前年よりやや多く推移した（±～＋）。

イ　向こう１か月の気象予報では、やや多発生の条件となっている（±～＋）。







フェロモントラップによるハスモンヨトウの誘殺数の推移

（３）防除上注意すべき事項

ア　地域によって発生量に差があるため、ほ場での発生状況に注意し、発生を確認したら直ちに防除を行う。

イ　薬剤防除は若齢幼虫を対象に実施する。

ウ　一部の薬剤においては、薬剤感受性の低下が懸念されることから、薬剤の選定に留意する。また、同一系統薬剤の連用は避け、ローテーション散布する。

エ　今後の発生状況については、病害虫防除所のホームページを参照する。（以下の害虫についても同様）

https://www.pref.fukuoka.lg.jp/contents/fukuoka-bouzyosyo-doukou.html#daizu-yasai

2　オオタバコガ

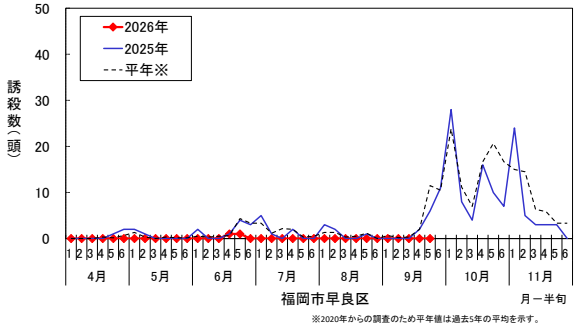
（１）予報の内容

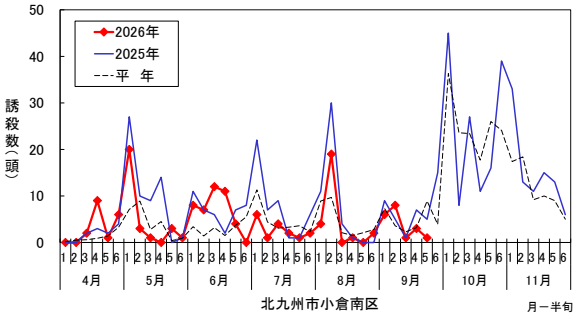
発生量：平年・前年並

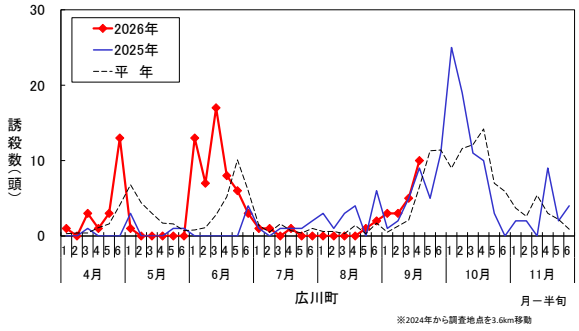
（２）予報の根拠

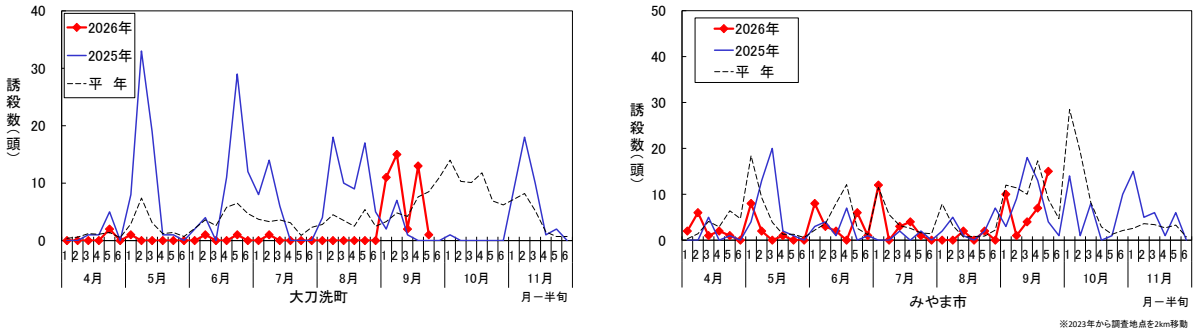
ア　８月５半旬～９月４半旬のフェロモントラップにおける誘殺数は、地域により差はあるものの、おおむね平年並で推移した（±）。

イ　向こう１か月の気象予報では、やや多発生の条件となっている（±～＋）。









フェロモントラップによるオオタバコガの誘殺数の推移

（３）防除上注意すべき事項

ア　地域によって発生量に差があるため、ほ場の発生状況に注意し、発生を確認したら直ちに防除を行う。

イ　薬剤防除は若齢幼虫を対象に実施する。

３　コナジラミ類

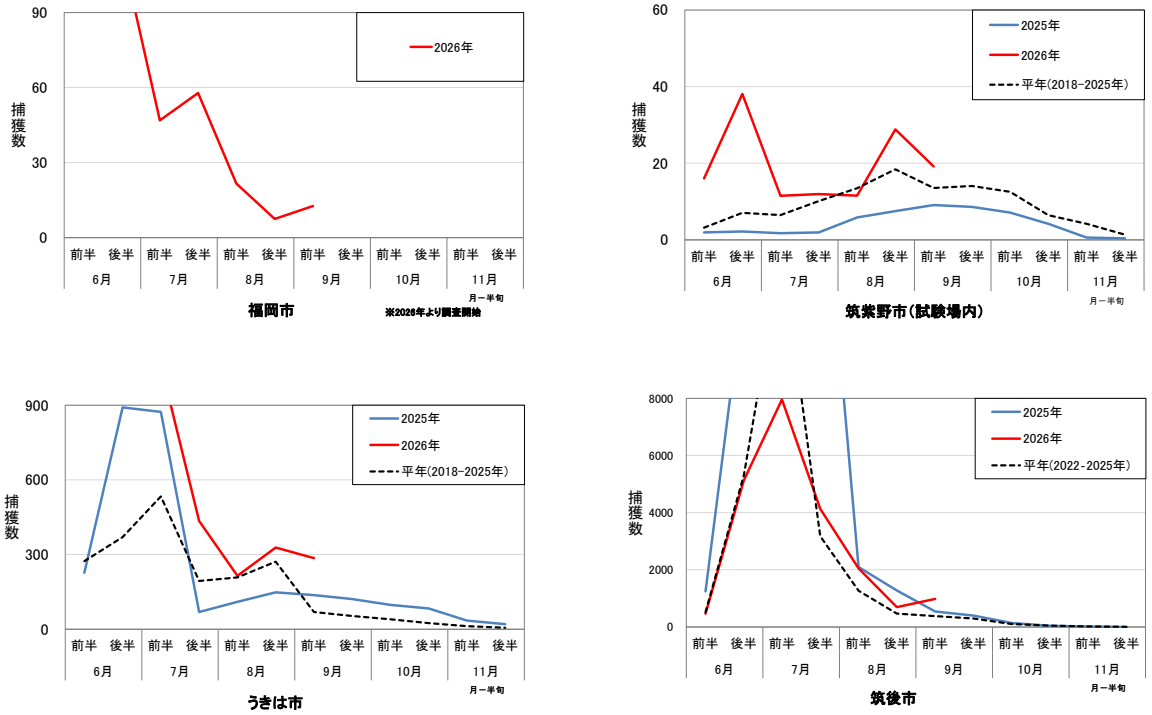
（１）予報の内容

発生量：平年・前年よりやや多

（２）予報の根拠

ア　８月後半～９月前半の粘着板トラップにおける捕獲数は、地域により差はあるものの、おおむね平年・前年よりやや多く推移した（±～＋）。

イ　向こう１か月の気象予報では、並発生の条件となっている（±）。



黄色粘着板におけるコナジラミ類の捕獲数の推移

注）冬春トマト栽培施設周囲の東西南北４か所に黄色粘着板を設置

（３）防除上注意すべき事項

ア　ほ場内や周辺の雑草は増殖の場となるので、除草を徹底する。

イ　施設内への成虫の飛び込みを防止するため、防虫ネットの目合いは0.4㎜以下にする。

ウ　黄色粘着板等の設置により発生状況を確認し、初発段階での防除に努める。

エ　苗による持ち込みを防ぐため、育苗時から防除を行い、本ぽへの持ち込みを防ぐ。
オ　栽培終了時には、コナジラミのハウス外への分散を防ぐ対策を実施する。
カ　「入れない、出さない、増やさない」対策を徹底する。

農薬の安全・適正使用、飛散防止対策の徹底を！

福岡県では、農薬の安全かつ適正な使用及び保管管理、使用現場における周辺への配慮を周知徹底するとともに、農薬による事故防止を目的として、農薬適正使用の指導を関係機関、団体と一体となって取り組んでいます。 農薬を使用する際は、使用者自身の安全確保はもちろん、周囲の人や家畜、隣接する作物、河川等の環境への影響にも十分配慮してください。

１　農薬適正使用の徹底

○適用作物、使用量や濃度、使用時期、総使用回数などが記載されたラベルをよく確認し、使用基準を遵守する。**※同一農薬であっても、メーカーによって登録内容が異なる場合があるので、しっかり確認する。**

○有効期限切れの農薬は使用せずに、産業廃棄物として適正に処分する。

２　飛散防止対策の徹底

○風の弱い時に散布する。
○風向、散布方向、散布時間、散布圧などに留意する。
○飛散しにくい農薬（剤型）や飛散が少ないドリフト低減ノズルを使用する。
○散布ほ場周辺の収穫前の作物には十分注意する。
○農薬散布の実施において、周囲の生産者、住民に周知を図る。

３　保護具の着用

○農薬の散布前に、ラベルの注意・警告マークをよく確認する。マスク、保護メガネ、ゴム手袋等を着用し、薬液を作成する。

４　農薬の散布後は、必ず散布器具を洗浄

○噴霧器、薬液タンク、ホースなどの散布器具を十分に洗浄する。残液は、ほ場外への流出や環境、後作へ影響が生じないよう十分配慮し、ほ場内の農作物が植え付けされていない土壌に散布する。
※農薬散布に際しては､残液が出ないように必要な量の散布薬液を準備する。

５　防除履歴の記帳

○農薬の散布が終わったら、作物名、ほ場の場所、使用年月日、薬剤名、使用濃度、使用量等を正確に記帳する。

６　空容器の処分

○空容器は、地域の農業用廃プラスチック適正処理推進協議会が実施する回収や、産業廃棄物処理業者に委託するなど、適切な処分を行う。また、野焼きは『廃棄物の処理及び清掃に関する法律（廃掃法)』で禁止されているので、絶対に行わない。

病害虫防除所のホームページでは、各種病害虫の発生状況を随時更新しています。
発生状況の把握や防除の参考にご活用ください。

①⇒

○福岡県病害虫防除所のホームページへのアクセス
URL：https://www.pref.fukuoka.lg.jp/contents/fukuoka-bouzyosyo.html
または右 QR コード①

②⇒

○Xのアカウント（福岡県農作物病害虫情報）へのアクセス
URL：https://x.com/PPDPO_Fukuoka　または右 QR コード②